

企画・編集：中村優子 広島大学大学院医系科学研究科 放射線診断科

序 説

画像診断医にとって読影レポートの作成は基本にして一生の仕事であり、必要十分なレポートが書けるようになることは研修医や若手放射線科医にとって重要かつ興味のもたれるところである。また現在専門医として日々レポートを作成している先生方も、筆者のようにそもそもよいレポートとはなんなのかと迷ったり、また不慣れな領域のレポート作成には不安を覚えることもあるのではないのだろうか。そこで今回「読影レポートの書き方」に焦点をおき、本特集を企画した。

まず近年注目されているstructured report(構造化記載形式)にも言及しながら、読影レポートの書き方について、信州大学 画像医学教室の山田 哲先生に概説いただいた。またよいレポートとは何かをご教授いただきたいと考え、筑波大学 放射線診断・IVR科の南 学先生、京都府立医科大学 放射線診断治療学講座の山田 恵先生、東北大学 放射線診断科の影山咲子先生らに、「私の考えるよいレポート」と題し、執筆を依頼させていただいた。

次に各論として、頭部領域は鳥取大学 画像診断治療学の加藤亜結美先生らに、胸部領域(乳腺MRI)は京都府立医科大学 放射線診断治療学の後藤真理子先生に、腹部領域(肝・脾中心)は山口大学 放射線医学講座の田辺昌寛先生らに、泌尿生殖器領域(前立腺MRI)は神戸大学 放射線診断学分野の上野嘉子先生らに、各領域に求められるレポートの書き方について解説いただいた。

「読影レポートの作成のしかた」という画像診断医にとっては永遠のテーマを取り上げたため、筆者も一画像診断医として思い入れが強くなってしまい、半分だめもとで高名な先生方に執筆を依頼させていただいたが、驚いたことに、すべての先生が執筆を承諾してくださった。各先生方のご尽力により、自由文記載形式と構造化記載形式のレポート作成の利点・欠点、よいレポートとは何なのか、そして各領域で求められるレポートの書き方まで、非常に充実した内容となった。監修にあたり原稿を拝読させていただいたが、「こんな特集が私は読みたかった!」という内容になっており、夢中になって熟読させていただいた。お忙しいなか本特集の執筆を引き受けてくださった先生方に深謝するとともに、本特集が読者のみなさんの明日からのレポート作成のお役に立てれば編者として大変嬉しい。

中村優子